



石坂 夢羽 (いしざか むう) 由井第一小 4年生

作品名：「命の大切さ」

図 書：いのちをいただく


毎日ごはんを食べる時に「いただきます」という意味を私は考えたことがありませんでした。「いのちをいただく」を読んで、大切な多くの命をいただいているから人は生きていけることを知ることができました。

本に出てくる坂本さんは、食肉センターにつとめていて牛の命を解いてお肉にします。坂本さんのように、牛を解く人がいなければ誰も牛のお肉を食べることができません。お肉を食べるにはなくてはならない仕事です。でも、命をうばわなくてはいけないので、悲しみや苦しみを感しながら仕事をしていることを知りました。

ある日、女の子が大切に育てた牛のみいちゃんが坂本さんの食肉センターに運ばれてきました。おじいちゃんと一緒にきたその女の子は「みいちゃん、ごめんねえ。」と何回も言いながら牛のお腹をさすってお別れをしていました。明日、お肉になる予定の牛です。その様子を坂本さんは見ていました。女の子と牛は小さい時から一緒に育ったので家族の一員だったと思います。おたがいが大好きで大切な存在だったと感じました。だけど、お肉にしなればクリスマスプレゼントもお年玉もあげられないので、おじいちゃんは牛を連れてくるしかなかったのです。この決断をしたみんなの気持ちを考えたら、私も悲しくなりました。

次の日、みんなの気持ちを知っている坂本さんが牛のみいちゃんの命を解かなくてはいけませんでした。その時がやってくると、みいちゃんの大きな目から涙があふれてきたのでした。きっとみいちゃんは「まだ生きていたい」という気持ちがあったと思います。女の子と一緒にくらしした幸せな時間があったから、自分がころされてしまうと分かって悲しくて泣いてしまったんだと私は思いました。坂本さんはその時初めて牛が泣くのを見たそうです。家族のように大事にされて育てた牛の命を解く坂本さんは牛の涙を見て、本当に辛く苦しくなったと思います。仕事を辞めたいと思う気持ちが伝わりました。

私がとても心に残った場面は、女の子がお肉になったみいちゃんをいただくところと坂本さんがまた頑張ろうと思ったところです。最初は、少しもらってきたそのお肉を女の子は食べなかったけれど、みいちゃんのおかげでくらせる



のだからありがとうと言って食べてあげないとかわいそうだとおじいちゃんが話したら、泣きながら、「おいしかぁ、おいしかぁ。」と感謝して食べたところです。そして、それを聞いた坂本さんがもう少しこの仕事を続けようと思ったところです。

私は食べ物を泣くぐらい感謝して食べたことはありません。感謝もしないでお肉が固いと文句を言って残してしまったことがあります。この本を読んでから、食べ物には全て命があるということに気がきました。今まではそこまで考えたことがなかったので沢山の食べ物を粗末にしていたと思います。野菜にもお肉にもお魚にも命があってその命をいただいて私たちは生きていけるということはこの本から学びました。そして命をいただくことは沢山の大切な命をうばっているのです。だからごはんを食べる時の「いただきます」には感謝をして言わなくてははいけません。これからは、一つ一つの命を大切にいただき、ありがとうの心を忘れないようにしようと思います。